

## 2 研究の実際

### (4) 児童生徒の知覚・感受を深める指導の手立て

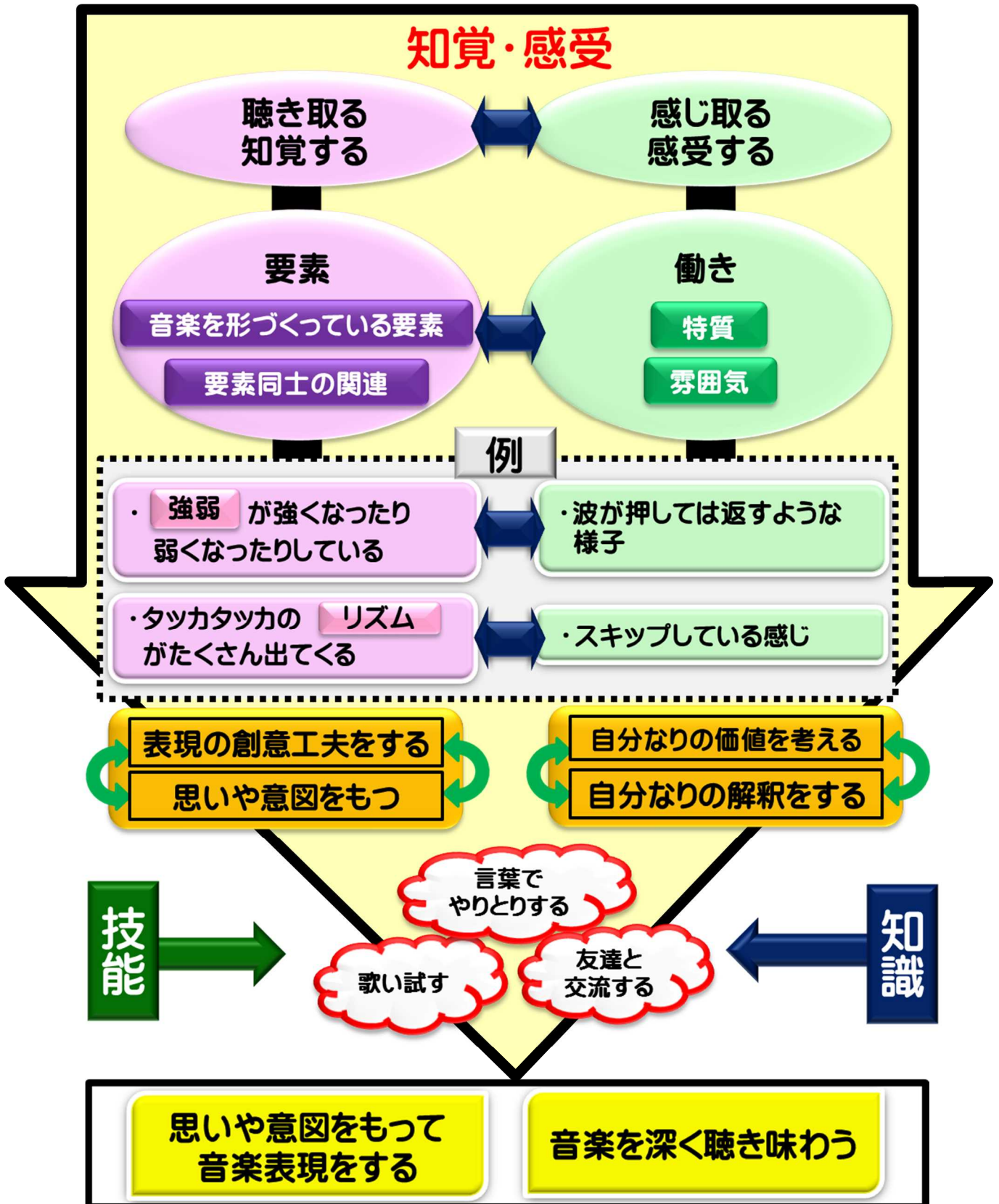


図2 知覚・感受を基盤にした音楽学習のプロセス

**前頁図 2**のように、〔共通事項〕を支えとした音楽学習においては、音楽の知覚する(聴き取る)ことと、感受する(感じ取る)こととを常に行き来させることが大切です。要素や要素同士の関連がどのようになっているかを知覚することと、そのことによって、どのような感じがしたのかといった感受の内容とを常に関わらせながら音楽に向き合う中で、音楽表現を創意工夫したり、自分なりの価値を見いだしたりすることによって、創意工夫したことを生かして豊かに音楽表現をしたり、音楽を深く聴き味わったりすることができるようになると考えられます。

**次頁図 3**は、知覚・感受を深めるための発問例と児童生徒の反応に応じた指導例をまとめたものです。

感受する場面においては、児童生徒が音楽を聴いて感じ取ったことをうまく言葉で表現できない場合があります。そのような時は、「感受シート」※1を用いるなどして、感受に関わる表現語彙を例示し、その中から自分が感じたことに合う言葉を選ばせ、言葉で表現することにつながる方法があります。その際、児童生徒が示された言葉を安易に選択することがないような配慮が必要となります。また、教師が「どんな感じがする？ 暗い感じ？それとも明るい感じ？」といったように、簡単な例示をしながら、選択させ、言葉で表現することにつながる方法などもあります。さらに、「明るい感じ」「楽しい感じ」など漠然とした発言や記述が見られる場合は、『『明るい感じ』』といってもいろいろあるよね。具体的にどんな明るさかな？」といったように、児童生徒と対話を重ねる中で、感じたことをより豊かに表現できるように導いてあげることが大切です。その際に、「ぴかぴかした感じ」「きらきらした感じ」といったように、擬音語や擬態語を用いて表現させることや、「夏の太陽のような明るさ」「夜空に輝く月のような明るさ」といったように、比喻を用いて表現させることで、児童生徒が感受したことをさらに豊かに表現できると思います。

知覚する場面においては、児童生徒の発言や記述の中に「リズムが遅い」「音色が強い」のように、音楽を形づくっている要素の用い方が適切でない場合が見られます。そのような発言や記述が見られた時は、要素の意味や用い方を指導する最適な場面と捉え、適時に指導することが大切です。要素の意味を再確認し、用い方の誤りを確認して全体で共有すれば、要素についての児童生徒の理解が深まり、その後の学習の充実につながることができます。また、「リズムがいい」「きれいな音色」「強弱がある」といったようなあいまいな発言や記述が見られた時は、「リズムがいい」とは、具体的にどのようなリズムに着目して、どのようなことを伝えたいと思っているのか、「きれいな音色」とは、どの音色のことについて発言(記述)しており、「きれいな」という言葉を他の言葉で言い替えるとどのようになるのか、といったように、児童生徒との対話を通して、音楽のどこに着目して聴き取ったのかということ、より具体的に引き出すことで、その児童生徒の本意を確かめることができます。

以上のように、児童生徒が自らの感性を働かせながら、知覚・感受して、それらを言葉などで表したりすることができるように、教師は発問を工夫して、児童生徒と対話を重ねることが必要です。その中で、〔共通事項〕に示されている要素や用語、記号などを正しく用いて、言葉で表現することや、自分が感じたことを豊かに表現することができるように、適切な指導を行うことが大切です。

※1 感受シート…「楽しい」「華やかな」など、児童生徒が感受したことを言葉で表現するときに使うことができる言葉を一覧にしたもので、本研究の検証授業で使用した。児童生徒が、音や音楽を聴いて、自分の感じ取った気持ちなどを、言葉でうまく表現できない場合に、補助的に用いた。また、知覚したことを正しい言葉で表現するための「知覚シート」も作成した。検証授業の中では「音楽を表すいろいろな言葉」として、小・中ともに教室の前面に掲示した。

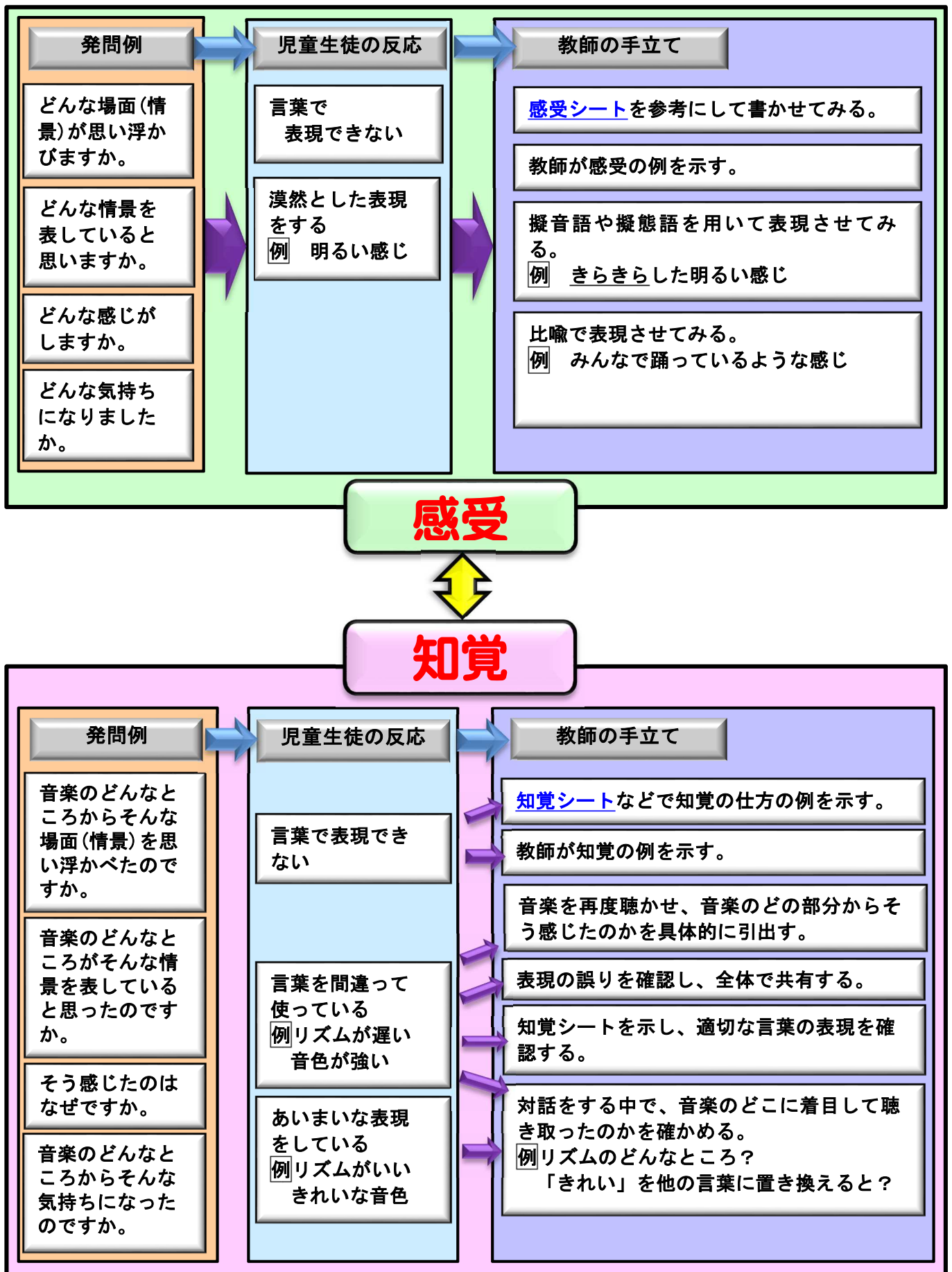


図 3 知覚・感受を深める発問例と児童生徒の反応に応じた指導例